連載

市長室からこんにちは

vol. 101

益田市長
山本 浩章

先月第100号を掲載したところですが、実は今回が100番目の「市長室からこんにちは」となります。どういうことかと言うと、遡及して調べたところ、第21号の次の月が第23号となっており、第22号が欠番となっていたからです。そして、まことに勝手ながら、毎月の定期的な掲載については、今月号をもって最終としたいと思います。

この連載は、自分が書きたいこと、市民の皆様にお伝えしたいことを月に1度、拙いながらも自由に述べさせていただく貴重な機会でした。もちろん立場上言いたいことが何でも言えたというわけではなく、遠回しに書いたり、裏に意味を含ませたりすることもありました。市政とは直接関係のないテーマを取り扱うこともありましたが、それらの多くは私自身の境遇や時々の思いを重ね合わせたものでもありました。

ただ、考えてみれば、好き放題にものを言うことができないのは私だけではありません。多くの方がこぼしたい愚痴を呑み込み、あるいは誰にも言えない悩みを胸の奥にしまいこんで日々を過ごしておられるはずです。このコラムは、人口5万人を切ったこの小さな町で、毎日を懸命に生きておられる市民の皆様お一人おひとりに宛てて、私から発したメッセージでした。

文章というものは、決められた字数をどうにかして埋めようとして書くととかく散漫で冗長になりがちです。反対に、どうしても表現したいことを絞り込み、さらに枝葉を取り払って、ぎりぎりまで濃縮したときに「力強さ」を得るものだと考えています。そのような端正で簡潔な文章をお届けできたかどうかは心許ない限りですが、決められたスペースに収めることに毎回苦心したことは確かです。

以前にも書いたことですが、本欄を読んでくださる方からの反響はとても励みになりました。広報ますだが届いたら真っ先にこのコラムを読むという声がモチベーションの最大の源泉でした。

これまでのご愛読と市の広報担当職員の労苦に深く感謝申し上げ、ひとまず筆を擱きます。

日本遺産のまち益田の歩き方

第7回 妙義寺

【問い合わせ先】
益田の歴史文化を活かした観光拠点づくり実行委員会
担当：市文化財課　☎31-0623

妙義寺は、七尾城跡の西側の麓に位置する曹洞宗の寺院です。

歴史は古く、寺に伝わる由緒書には、秀兼（益田兼家のこと）が木叟和尚を開山（初代住職）に招き建立したと記されています。益田兼家は15世紀前半頃の益田氏当主であることから、妙義寺はその頃に建立された（このとき曹洞宗に改宗したとも）と考えられます。

妙義寺が大きく興隆したのは戦国時代の益田藤兼の頃と考えられます。天正9（1581）年に、長門国深川（山口県長門市）の大寧寺から住職の関翁殊門が招かれました。大内義隆が自害したことでも有名な大寧寺は、中国地方における曹洞宗の中心的な寺院でした。妙義寺と大寧寺に強い結びつきを作ることで、藤兼は妙義寺の興隆を図ったのでした。

また、この時、波田・澄川・都茂・丸茂などの15の寺が末寺とされたと記されています。

妙義寺では、平家物語で有名な「沙羅双樹」とされるナツツバキが6月に見頃を迎え、茶席やコンサートを楽しむ「沙羅の花をめでる会」が開かれます。

また、「坐禅会」も行われます。

歴史ある寺院で、戦国武将の気持ちになって座禅をしてみませんか？

本堂裏の墓地や境内左手奥の桜谷には、中世の石造物が多く残されています。

特に妙義寺境内桜谷五輪塔（伝益田藤兼墓）は、市内の数ある石造物の中でも最大のもので、その迫力は圧巻です。

※「沙羅の花をめでる会」は、新型コロナウイルス感染症の状況により、開催中止となる可能性があります。

場 七尾町1番40号
石見交通バス各路線のバス
益田本町バス停徒歩7分

妙義寺。本堂手前や庭園にナツツバキがある。